

# 川根地区中高連携だより

川根地区連携型中高一貫教育協議会

## ■ 川根から世界へはばたく

「2020 年に東京で開催されるオリンピックに出場することが私の目標です。」とカヌースプリント競技の大村朱澄選手は、生徒の前で力強く語りました。本校では、地域や各方面で活躍している本校出身者を講師として迎え、『先輩に学ぶ』講演会を開催しており、今年は城北信用金庫アスリートクラブに所属している大村選手にお願いしました。

大村選手は、兄たちの影響で小学 2 年生からカヌーを始めました。最初は大会に出場しても上位に入賞することはできず、悔しい思いをしました。負けず嫌いな性格である大村選手は「いつかきっと優勝して金メダルを取りたい。」という思いを募らせていきました。中学時代は本校バレーボール部に所属していましたが、カヌーの練習に明け暮れる毎日でした。放課後になるとすぐに接叡湖に行ってカヌーの技術を磨き、練習が終わってからさらにウエイトトレーニングで筋力や体力の向上に努めました。その甲斐あって、全国中学生大会で 2 連覇を果たし、小学生のとき味わった悔しい思いが大きな喜びへと変わりました。川根高校時代も国体に出場し、2 連覇を達成するなど輝かしい成績を収め、戦いの場は日本国内からアジア、そして世界へと広がりました。2011 年に開催されたアジアカヌースプリント選手権大会で見事 2 位に入賞し、2012 年のロンドンオリンピック日本代表に選出されました。

ロンドンオリンピックでは、カヌースプリントペアの部門に出場しましたが、世界との差は歴然で、予選を突破することはできませんでした。そして次のリオオリンピック出場を目指しましたが、大村選手は予期せぬスランプに陥りました。向かうところ敵なしだった大村選手でしたが、ライバルに負け、若手選手にも追いつかないようなレース展開が続きました。トレーニングしても全く力が入らない、自分の思うような漕ぎができないという苦しい日々でした。貧血などの体調不良も原因だったそうですが、大村選手は自分に合った練習方法を考えなければいけないと思ったそうです。それまではコーチから指示されたメニューをこなしていれば力がつくと思っていたのですが、自分の身体には合っていなかったということに気がつきました。

2016 年に開催されたいわて国体では、カヌースプリント成年女子 200m で 2 連覇を果たし、500m でも優勝し、復活を遂げました。大村選手は、技術面や体力面のトレーニングだけでなく、体力や筋力を向上させるための栄養バランス、そして大会にベストで臨むことができるコンディションづくり、さらに最高のパフォーマンスが発揮できる精神力の強さなど総合的に自分自身を鍛えることが必要であると悟りました。

東京オリンピック開催まであと 2 年と迫りました。本校、そして川根高校出身の大村選手が、東京オリンピックという世界の場で人生最高のレースになることを祈っています。

(本川根中学校長 渡邊朗由)

## ■ 秋季中高合同研修会 11 月 21 日(火)

中高の職員に加え、県と市町の教育委員会からの参加も得て、秋季研修会が川根高校セミナーハウスで行われました。愛知教育大学教職大学院教授の佐藤洋一先生による演題「新学習指導要領で育てる『資質・能力』と求められる授業力・教師力ー言語能力と汎用性、中学・高校の連携と実践課題等ー」の講演に続き、授業交流、公開授業、生徒交流、川根の郷の夢を語る会、の 4 委員会の部会で川根地区の中高一貫教育の更なる充実のための研修が行われました。中高一貫教育全国大会の報告は、大会開催の時期の都合で、30 年度に繰り下がります。



## ■ 川根講演会 1 月 22 日(月)

日本海側をスタートし、アルプスの山々を横断、ゴールの駿河湾を目指す。しかも 415 キロを 4 日間で。実際にできないことだが、私だったら聞いただけですぐに「無理だ」と決めつけてしまう。しかし、講師の望月さんはこのトランスジャパンアルプスレースに挑戦し、現在 4 連覇中というすばらしい成績を収めている。自分を知ることができるレースだと話された望月さんの講演で一番心に残ったのは「まずは一歩から」という言葉だ。一歩を踏み出さなければ何も始まらないし、そこには成功や失敗もない。何事も無理だと決めつけずにやってみようと思った。それは自分の将来のためなのだ。



そこには成功や失敗もない。何事も無理だと決めつけずにやってみようと思った。それは自分の将来のためなのだ。

(川根高校 2 年 諸田奈津希)

ものすごい記録を残したのには、様々な辛いことでも乗り越えてきたからだとなりました。望月さんの「昔からやっていた登山が源になった」という言葉がとても心に残っています。今、当たり前のようにやっていることが「将来の自分のやりたいこと」「自分に合った職業につながる可能性があること」なんだと改めて思いました。今の自分をもう一度見直すきっかけになり、自分の良さを考えました。また、望月さんも講演で話していましたが、「自分を知る事が一番の強さ」と言うように、これからも自分自身と常に向き合って一歩ずつ、夢に向かって頑張りたいです。

(中川根中学1年 小田切駿)

## ■ 川根の郷の夢を語る会 2月8日(木)

授業見学では、中学校で学習することをさらに細かく学ぶのだということが分かりました。高校3年生の講演から進学や就職は早めに調べて知るということが大事であり、特に高校受験では学校見学に行き、その校風を知ることが大切だと知りました。また、今まで大きな学校が良いと思っていましたが、小さな学校にも少人数ならではの良い特徴があることが分かりました。分散会では川根地区の未来を話し合い、他の学校の人の考えも聞くこともできました。話し合いで出たことを守ったり創ったりすることができると思います。

(本川根中学2年 小澤知波)



同じ川根地区に住む中学生・高校生と一緒に話し合うことで、川根の現状を理解し、未来のことを考えるきっかけになって良かったです。今の川根は昔に比べて人口がどんどん減少し、学校・学級の数も減っていることがわかりました。そして、僕たちのグループでは、自然やお茶を残したいという人が多く、共感できました。また、創りたいものは、「公園」という考え方に少し驚きましたが、納得しました。高校生の授業を見せてもらって、自分たちの授業よりも発表やつぶやきが多く、さすがだと思いました。人数が少ないので、先生も一人一人に指導していて良かったと思いました。講演にもあ

ったように、実際に見てみるのが大切だと実感しました。

(川根中学2年 西野愛貴)

## ■ 15年間の連携型中高一貫教育を振り返って

平成14年の4月に産声をあげた川根地区連携型中高一貫教育が、今年で満15歳となりました。連携型中高一貫教育のスタートとともに川根高校に入学した生徒も、今年で30歳となり町内外の各方面で活躍しています。当時、本川根中学校の教務主任の立場で、その立ち上げに関わった者としては大変感慨深いものがあります。

スタート当初は、4中学校と川根高校による「連携」の視点での「川根地区クリーン作戦」と、「一貫」の視点での「交流授業」・「中高一貫を意識した各教科のシラバス(年間指導計画)の作成」が主な取組でした。中学生と高校生が地区ごとにグループを組んで町内の施設等の清掃に取り組む「川根クリーン作戦」では、年数回の会合はもちろん、電話での連絡・調整を頻繁に行いました。また、中・高6年間を通しての教科指導の指針となる「シラバスの作成」にあたっては、連携中学校と高校の各教科担当が一同に介し、熱い議論を交わしました。

今振り返ると、打合せや準備、「シラバス」の作成など多忙ではあったものの、自分を含めて携わった先生方が多忙感を口にすることはありませんでした。それは、川根地区の子どもたちの教育に携わっていた先生方一人一人が、川根に対する生徒の思いを醸成したいという強い想いと子どもたちへの期待をもち、協働作業にあたったからだと思います。

今、川根高校では、川根留学生や公設民営塾など他に類をみない取組がなされています。15年前に比べ、ハード面での連携型中高一貫教育の体制は充分すぎるほど整いました。後は、生徒一人一人が「川根に対する想いを深める」ことができるよう、「生徒一人一人の個性を重んじ、生きる力を育む教育を目指すとともに将来の川根地区を担う有意義な人材の育成」という理念を再確認し、事業を展開していくことが大切だと感じている今日この頃です。

(中川根中学校長 鈴木憲)

### 川根地区連携型中高一貫教育協議会

連携校(静岡県立川根高等学校、島田市立川根中学校、川根本町立本川根中学校、川根本町立中川根中学校)  
事務局：川根高校 TEL57-2221 E-mail:kawane-h@edu.pref.shizuoka.jp ご意見お待ちしております。